

工場が呼吸する

年がら年中冬のように

私はまた祈りを捧げる

小沢旭

山梨県

建物の中でも、工場は大きな生物のように長くゆるやかな呼吸をしているのを感じる。ひと息ひと息のゆらぎが巨大な工場の輪郭をいつそう濃くしていくし、その濃さ、という硬質さは主体に冬を感じさせる。冬の気配を受けながら、変化もそうでないものも見つめ続ける。その行為は“祈り”に似ている。

チヨコくれた男にはしゃぐ

世界地図みたいな痣を

腹にかくして

うろ仔

北海道

“はしゃぐ”、という感情の表層性を思う。その感情の表皮の真下には正反対の想いが潜んでいるのかもしれない。服もまた自分を覆う表皮のような存在で、その下には「世界地図みたいな痣」がある。はしゃぐとは、塗りつぶす密度が高いのだ。自分のみを感じる層をうまく描いた。

痒みにもたくさんの種類があり

マグダラのマリアが零す涙

志内

悠真 京都府

人間が最も耐えられない感覚は「痒み」で、どんな屈強な男性でも痒みの拷問は耐えられないらしい。マグダラのマリアの涙は悲しみか怒りか慈愛か。誰の涙でも本当の心はわからなけれど、マリアもまた人間らしく痒みに耐えているのかもしれない。

本の上その上の上の上は空

昼は余白に寝そべっている

雲理そら

大阪府

見えないものが折り重なることで空間ができあがるのか、物質が存在することで空間の認知が変わるのか。私たちは常に無自覚に空間を変化させながら生きている。無いものを感じる力は描写の力である。空もより広く感じそうだ。

産みたくて産みたくて仕方なかった

た居ないあなたを産みたくて仕方

五月閉じ花 北海道

叶わないものほど焦がれてしまうのはなぜだろうか。ここに「居ないあなた」はもはや心だけにしか居らず、「仕方」の続きも延々に続いていくのだろうか。どんどん自分へのみ向かっていく意識。産むというある種の絶対な関係を一方的に結びたがるのは、果たして愛なのか。

二人ごと燃やしてほしい

手すりから身を乗り出せば

夕日が近い

ひろみ 京都府

一人で生きていくくらいならば、二人で燃やされたい。未来を望めない関係なのだろうか。想いさえ自分で燃やし尽くしてしまいそうな情熱がある。心だけでも心中したい、そんな気持ちで手すりから上半身を乗り出して夕日に近づく。

火葬される身体抱えて焼き林檎

飛和 長野県

誰もがみな火葬される存在であり、死という時期が目の前に訪れていなくても淡くその気配を感じながら生きている主体。火葬される身体を抱え、その身体が抱える焼き林檎。命の核に近づいていくのは、燃えているものに近づいていくことなのだろうか。

黄泉に風花 空っぽの観覧車

加那屋こあ 東京都

黄泉の世界の観覧車はだれも乗らないまま回り続ける。乗ることができない、というのが正しいかもしれないが。空っぽのゴンドラの中だけ雪は降らず、外の空間を埋めてゆく。その様は、器を持ってなかった命のようにも見える。

目の中に無数の花火の残像を

飼ったまま金魚を覗きこむ

狛犬 吠 岡山県

美しいものを見てきた体には、それが残る。無数の花火がまだ燃えたままの主体の目で金魚を覗き込み、現実には共存できないものを体のなかで戯れてさせている。花火も「飼う」と生命体の括りに入れているのも面白い。花火の中で燃えずに泳ぐ金魚のたましい。

曼珠沙華ふれてはならぬ人という

さとマル 愛知県

本当は触れていい人の方が少ないのに、触れたいと思ってしまうばかりに触れられなさ  
が際立つ。曼珠沙華は非常に複雑な花形で、一輪でも花弁同士が絡まるように噛み合いなが  
ら咲く。触れすぎても苦しいのかもしれないが、曼珠沙華の姿を眺めながら何も無い、と  
思ってしまう心の空白に何かがなだれ込んでくるようである。